

令和2年度 倫理総合 (3単位) シラバス	学 年	3年(文型)
	学 科	普通科

I 教科書

「高校 倫理 新訂版」：実教出版

II 副教材・資料など

『テオリア 最新倫理資料集 新版二訂』：第一学習社

「新倫理ノート 要点のまとめ十一問一答」：啓隆社

III 学習の目標

人間尊重の精神に基づいて、青年期における自己形成と人間としての在り方生き方について理解と思索を深めさせるとともに、人格の形成に努める実践的意欲を高め、生きる主体としての自己の確立を促し、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。

- (1) 二学年で学習した哲学や思想の基礎的内容を土台として、それらの知識理解をより深められるようにする。
- (2) わが国の文化や思想を、西洋思想との比較において、より多角的に理解し、人間として在り方生き方についての理解を深める。
- (3) 相互依存の高まる現代の国際社会において、国際平和の確立や人類の福祉に貢献することの意義を理解し、21世紀の国際社会において主体性のある日本人としての在り方、生き方についての思索を深めさせる。
- (4) 学習した知識・理解と自己表現が一体となるような、対話的思考能力を育む。

IV 授業方法・形態

講義・作業・発表等が中心となるが、グループ学習や哲学対話の手法もとり入れる。資料・新聞・ビデオ教材などを多面的に利用し、ノート・プリントをまとめていくことで内容の深化・理解を図る。時事問題や国際問題などにも目を向け、他教科や既学習範囲とも関連づけた学習になるように工夫する。

V 評価の観点

評価の観点	内 容
関心・意欲・態度	社会と人間に関わる事柄に対する関心を高め、意欲的に課題を追究すると共に、平和で民主的なより良い社会の実現に向けて参加、協力する態度を身に付け人間としての在り方生き方についての自覚を深めようとする。
思考・判断	現代の社会と人間にかかわる事柄から課題を見だし、社会的事象の本質や人間の存在及び価値などについて広い視野を踏まえ公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。
資料活用の技能	現代社会と人間に関わる事柄に関する諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、効果的に活用している。
知識・理解・表現	社会と人間にかかわる事柄について、哲学者や他者(協同学習者)の意見に耳を傾け、自己の生活経験と結びつけて理解するとともに、自己の価値観を形成し、他者に伝えることができる。

VI 授業計画

期	月	単 元	学習のねらい(目標)	時数	進 度
1	4 ~ 7	第1編第3章 日本人としての自覚 第一節 古代日本人の思想 第二節 日本の仏教思想 第三節 近世日本の思想 第四節 西洋思想の受容 哲学対話(3時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・古代的精神である「清明心」が、今の私たちにどのように息づいているかを自覚する。 ・一神教における社会や人間の在り方との違いを理解するとともに、仏教思想と西洋近現代哲学との共通点にも気づかせる。 ・明治の思想を学習するにあたっては、とくに社会の劇的な変化と人間の生き方との関連に注目させたい。 ・京都学派の難解な思想を、西洋近代哲学の知識理解と結びつけて学ぶ。 	3 6	
		第2編第1章 第4節 社会と個人 哲学対話(2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・功利主義の思想を、カントの道徳論との対比に焦点をあてて理解する。 ・マルクス主義を、ヘーゲルの歴史観との対比に焦点をあてて理解する。 ・実存主義の思想を、自分自身の生き方・在り方に結びつけて理解する。 		

2	9 ~ 1 2	<p>第5節 人間への新たな問い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構造主義 ・精神分析学 ・フランクフルト学派 ・メルロ=ポンティとデリダ ・レヴィナス <p>哲学対話（2時間）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現代社会や現代文明に対する批判的な視点を獲得する。 ・理性と言葉の性質を、生活経験に照らし合わせながら理解し、現代哲学が、それらに対する常識的な理解の限界を鋭く指摘していることに気づく。 ・他者の存在が、自分の生にどのような影響を与えるのか、生活経験に照らし合わせながら理解するとともに、現代文明の新たな方向性を見いだせるようにしたい。 	3 3	
		<p>第2編第2章 現代の諸課題と倫理</p> <p>第一節 生命倫理 第二節 環境倫理 第三節 家族と高齢化社会 第四節 情報倫理 第五節 国際平和と福祉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・応用倫理の範囲については、特に時事問題を中心に対話的学習を実践する。 ・グラフやアンケート調査結果などの資料を活用し、それらを読み解き、文章化できるようにする。 ・資料が提示する諸問題に対する自分の意見を、様々な思想や哲学と結びつけながら形成する。 ・できる限り、映像資料を活用する。 		
3	1 ~ 2	<p>第1章第1編</p> <p>第一節 青年期の意義 第二節 青年期の課題</p> <p>哲学対話（3時間）</p>	<p>既習事項を振り返りながら、今の自分自身の在り方を見つめなおすとともに、自分自身の人生や、進路について考察し、対話する。</p>	6	

Ⅶ 評価

試験(定期考査・実力テスト)、授業態度(意欲・態度)、提出物(ノート・プリント・課題)を総合的に判断して行う。

到達目標を達成できたか	自己評価	〈次学期（次年度）に向けての課題〉	年間授業時数
A(80%以上)	1学期		90 時間
B(65%以上)	2学期		
C(40%以上)	3学期		
D(40%未満)			